第一章

少年時代

殉教の地・長崎に生まれて、初誓願を立てるまで

提灯で山道を照らしながらミサに通う

私は長崎市の浦上の生まれです。生家は長崎市を見下ろす小高い丘の上にありました。

というのも、私の先祖は江戸時代の隠れキリシタンでした。キリスト教が禁止されていた江戸時代に、長崎では〝浦上崩れ〟と言って、秘かに信仰を保っていた信者が奉行所に検挙される事件が4回ありました。一番崩れが1790年～1795年（寛政2年～7年）、二番崩れが1842年（天保13年）、三番崩れは1856年（安政3年）、四番崩れは1867年～1873年（慶応3年～明治6年）に起きました。特に四番崩れは、幕末・明治にかけて、内政・外交上の大問題になったのです。

浦上のキリシタンたちは、日本に上陸した神父に信仰を告白。死者を仏教の僧侶の手によらず葬ったことから、主要信徒が投獄され、キリシタン全員が流罪に。しかも、キリシタンが集まると危険だからと、あちこち分散させられたんです。そのことを、私たち信者は〝旅〟と言っています。旅をさせられる、つまり流刑になったことを指しているのです。私の先祖は鹿児島に流されました。

徳川幕府が倒れて明治政府になっても、キリシタンへの弾圧政策は変わらず、流刑者はそのままでした。当初から、フランスをはじめとする外国公使団は、信教の自由の理念から強く抗議。条約改正交渉のために欧米に渡った岩倉具視の使節団が、各国政府から抗議を受けるなど明治政府も窮地に陥り、1873年（明治6年）に実に259年振りにキリシタン禁制の政策が廃棄されました。これを受けて、流刑者も許されて浦上に帰って来たのです。

しかし、財産は没収されていましたから、町からはずれた辺鄙な山に登り、そこを切り開いて新しく生活を始めたのでしょう。ですから、私の生家がある山の村は迫害を受けたキリスト教信者の子孫たちが住んでいま

した。

私はそんな信仰の村で、1925年（大正14年）12月に11人兄弟の10番目として生まれました。おまけのようなもんです（笑）。先祖代々の熱心なカトリック信者の家ですから、生まれてすぐ洗礼を受けました。

生家は11人の子供と両親、祖母が一緒に暮らす大家族で、農業で生計を立てていたんです。父親は畑でジャガイモやサツマイモ、玉葱、トマトなどの野菜を作って、朝から晩まで働いていました。家族を食べさせるのに一生懸命ですよ。母親も14人分の食事を作って、洗濯をして、農作業をして。それだけでも大変なのに、作った野菜を背負って町に売りに行く。売ったお金で必要な食料を買い、子供たちのために果物の残り物なんかも安く買って来てくれたものです。そんな母親を見て、子供心にかわいそうに思っていました。朝早くから働いているのに、夜も夕食の後片づけをして、翌日売りに行く野菜の下準備をしているでしょう。〝疲れているのだから早く寝ればいいのに〟と思って見ているんですが、なかなか寝ない。そして、夜中の12時頃、寝る前にお祈りをしていました。縁側に座ってロザリオを切っている姿が、とても印象的でしたね。テレビを見ながら寝ころんでいる、今の母親とは大違いですよ（笑）。

やはり、親の後ろ姿を見ながら育つというのは大切なこと。私も一生懸命働く両親の姿を見て、子供なりに真面目にやらなければと思ったものです。

信仰の厚い家庭で育ったから、自然に教会に行くようになりましたね。小学校4年生ぐらいの時から、毎朝、夜が明け切らない5時頃に起こされて、兄弟や近所の人たちと一緒に、提灯で足元を照らしながら、歩いて教会へ通ったものです。教会が遠くて、行きは下りだから早くて30分くらい。帰りは登りで40～50分もかかってしまいます。獣道と言って、獣が通るような細いくねくねした山道を歩きました。教会でミサにあずかって、いったん家に帰ってから、小学校に登校。学校が終わると、週3日は教会に行きました。そこで、神様は全能

であるとか、天国と地獄の話などを聞かされました。兄弟とケンカしたり親の言うことをきかなかった時など、何か悪いことをした時は懺悔することも教わりました。

もちろん、子供だから遊びたい時もありますよ。そんな時は、ビー玉をしたり、蝉をとったり、旗揚げしたり。タコ揚げのことを長崎では旗揚げと言うんです。学校から帰ったら、教会に行くか遊ぶかだから、小学校では全然勉強しなかった。家には机もなかったし。だから、学校の成績は甲乙丙の乙ばかり。今で言うとオール3です。

その頃、長男や次男、三男は小学校を卒業して、長崎にあった三菱の職工学校、今で言う専門学校に行って、そこを終えて三菱に就職していました。兄たちが、私たち幼い兄弟に必要な靴や帽子を買ってくれたのを覚えています。

大家族みんなが混じり合って一緒に暮らしていたというのが、私の小学校時代です。

〝家の誉れ〟と励まされて、修道院へ

小学校6年生の時、長崎市にあるマリア学院に進学しないかと母から言われました。マリア学院というのは、修道士を養成する修道院です。でも子供だから、そう言われてもよくわからない。それで、どんなところなのか見に行きました。着いたのがお昼休みで、みんなが野球やったりテニスをしていて楽しそうだったんです。〝ここはいいじゃないか〟と思って、「僕、マリア学院に行ってもいいよ」と返事をしました。それが運の尽き

きでしたけど（笑）。

修道院に入るというのは、カトリックの信者にとって選ばれた者という感覚なんです。だから、家族も近所の人も〝名誉なことだ〟と喜んでくれました。私たちが住んでいた村は、信者の部落のようなものだから、村から修道者になった人もいますし、司祭になった人もいます。私の姉も1人、シスターになっていました。そんなことで、修道会の募集担当者が私の家に薦めに来たんじゃないでしょうか。

1937年（昭和12年）4月、母が私の身の回りの荷物を入れた柳行李を持ち、私はその後をトコトコついてマリア学院まで歩いて行きました。全寮制だったので、それから4年間マリア学院で生活することになります。

修道院の生活は、すべてが規則正しく行われます。6時起床、6時20分にはチャペルでお祈り。その後、30分勉強して朝食。それから午前中2時間授業があって、1時間の昼休み。午後2時間授業があって、4時からは掃除。6時半まで自習して、チャペルでお祈りして、7時半から夕食。すべてキチンと時間が決められていて、軍隊生活のようなものです。それが4年間、淡々と続きました。授業の内容は普通の中学校と同じ英語、国語、数学。そのほかにフランス語や新約や旧約の聖書の授業もありました。

毎週月曜日には親と面会できるので、その時、親がおいしい物をこっそり持って来てくれました。本当はいただいた物はみんなで分けるのが原則だけど、親は自分の子供にと思って持って来てくれるから、こそこそ食べてね。だから、あまりおいしくなかったり、却っておいしかったりしました（笑）。私が家に帰れるのは夏休みの40日間だけ。その間は、畑仕事を手伝ったり、山で燃料用の木を伐ったり。一生懸命に家の仕事をしました。

修道院生活で最後まで残るのは、10人に1人ぐらいです。子供の集まりですから、いじめられたり、ぶたれ

たり。けんかもありました。勉強していると「真面目だ」といじめられました。私が卒業まで辛抱できたのは、親が喜んでくれること。そして、入学する時に近所の人から〝家の名誉だ〟とか言われていたので、辞めて親に恥をかかせたらいけないという理由でした。子供だから神様のため、社会のためなんて思っていませんでしたよ（笑）。

戦雲立ちこめる中で上京

長崎のマリア学院を経営していたのは、マリア会という修道会です。修道会はいろいろあって、上智大学や栄光学園を運営しているのはイエズス会、白百合学園はセント・ポール、聖心女子学院は聖心会、雙葉学園はサン・モール、聖光学園はクリスチャンブラザーズという具合です。

私が所属するマリア会は、東京で暁星学園、大阪で明星学園、長崎で海星学園を開校していました。マリア会の修道院に志願して入った者は、東京の暁星中学を卒業させるという進路が決められていました。私も1941年（昭和16年）にマリア学院を卒業すると、上京して暁星中学の4年に編入。長崎で勉強が遅れていたため、1学年落とされて編入されたんです。すぐ隣の修道院で寝起きして、学校に通う毎日でした。

ただし、この頃になると太平洋戦争が始まっていたので、勉強と同時に富士の裾野で合宿しながら軍事教練も受けました。キリスト教の教えと軍事訓練は矛盾しないのか、内心は複雑なものがありましたが、戦争は国がやっていることなので仕方がないという教育を受けました。国のために戦うことはキリスト教の教えに反しません。日本国民として為政者に従うのは当然の義務ですし、キリスト様も「神のものは神に返し、カエザルのものはカエザルに返せ」とおっしゃっています。神への義務と国への義務を区別してやったのです。神社で拝むのは抵抗がありましたが、バチカンと日本のカトリック教会の話し合いで、儀礼的に尊敬を表しました。心の中で〝頭を下げるのは拝むことではない〟とつぶやいていました。

初誓願の決意

暁星学園の中学4年生を終えると、1年間休学して修練院に入りました。というのは、当時は修道院に所属しているだけでは徴用されて、軍需工場で働かなければいけなかったからです。東京の郊外にある清瀬の修練院に入ったのですが、途中で軍に接収されたので、神奈川県の茅ヶ崎にある修練院に移り、最後は東京の暁星学園の隣のシャミナードに来ました。

修練院は修道院よりも厳しく修養するところ。1年間、ラジオも新聞もなしに完全に俗世間から隔離されます。一生涯、修道院に入るのかどうかを決める期間という位置付けです。修道生活とはどういうものかを学び、その生活に耐えられるかどうかを試されるわけです。

毎日、お祈りと黙祷、新約聖書・旧約聖書、教会の歴史などを勉強。マリア会の憲法が第1条から303条まであるんですが、それを全部暗記させられたりもしました。

1日1時間労働の時間があって、農作業をしたり、ミシンをかけたり。掃除も毎日。部屋はもちろん、トイ

レの掃除まで全部やりました。私は29歳まで学生だったから、自分で掃除や洗濯をしていて、年季が入っているから上手なもんですよ。今、木更津の全寮制の生徒の部屋を見て、私が掃除してあげようかと思うくらい(笑)。修練院を卒業してスイスの神学校に行った時も、世界各国から学生が来ていたけど、私は上手でしたよ。

そのほか動物飼育の割り当てもあって、私はメスの山羊の担当。雨の日も風の日も、草を食べさせて、乳も搾りました。

修道院の生活に耐えられるかどうかの試練も与えられました。食事をしていると、笛がピーと鳴って「誰々さん、床に跪いて食事しなさい」。命令された人は、他の人はテーブルで食事しているのに、自分だけ床に跪いて食べなければいけません。どこまで謙虚になれるかと試されているわけです。食器を洗っていて食器を壊してしまった時は、チャペルで30分間祈りなさいとかね。

修道院に入るというのは、俗世間から去るということ。自分に打ち克たないと、修道生活は続けられません。だから、そうした生活に耐えられるかどうかを試されていたのです。

私は小さい頃から、長崎でもカトリック信者であることによって、「耶蘇教だ、バテレンだ。そんなものを信じてどうするんだ」と糾弾されました。宗教の自由が確立している現在とは、時代が違っていました。上京して暁星学園に入学した時も、ミッションスクールではあってもカトリックは少数派でした。修道院にいましたから、学校では「何で坊主になるんだ」と言われたりして、そんなことに耐えていたので精神的に強くなっていたのかもしれません。

しかし、修練院で学ぶべきことの本質は、修道士が立てる誓願とは何かです。誓願とは願をかけること。願というのは、「清貧・貞潔・従順」の3つを誓うことです。

清貧とは、一生涯財産を持たないこと。衣服などは自分の物ですが、その他金銭や財宝などは所有しません。

私が今着ている上着は、何十年も前に作った綿のもの。縮んでツンツルテンだけど、まだ着られるから。ある時、卒業生の奥さんでファッションにうるさい人が、「先生、その上着は短すぎてオカシイ、貧相だ」と言うんです。「いいんだよ、神父が貧相なのは当たり前なんだから」と答えたら、苦笑いしてましたよ。

この上着の下は、シャツが15枚あれば死ぬまで大丈夫(笑)。シャツは破れるまで着ます。先日も、学校の会議の時に、シャツの袖口がほころびて、糸が垂れているのに気が付いたんです。会議の時は意外に時間があるもの。こそこそと小さなハサミを出して、ほつれた糸を切っていたら、ある先生に見つかってしまいました。会議の後、「校長、何していたんですか?」と聞かれて、「シャツのほころびを切っていたんだよ」「買えばいいじゃないですか」「まだ着られるから、いいんだ」。やっぱり、苦笑されました。

ひげ剃りも40年前に初めてヨーロッパに行く時に、お餞別にいただいた物をズーッと使っていて、それがダメになったんで、この間初めてデパートに行って、似たのを買ってきました。

貞潔とは一生独身生活を送ること。私はマリア学院に入ってからというもの、女性と接する機会はまったくありませんでした。その後もヨーロッパに行った時に、シスターと話をするぐらいです。しかし、女性に憧れを抱いたことが一度もないわけではありません。ないと言ったら、私は人間じゃないみたいじゃないですか(笑)。でも、それは闘いなんです。自分に打ち克つ、心の闘いです。その闘いに意義があるのではないでしょうか。

従順とは、命令に服従することです。フランシスコ・ザビエルの昔から、宣教師は教会の命令1つで故国を出て、地球の反対側にある見たこともない異国に赴任。布教活動を始めたのです。暁星学園の創立者である5人のマリア会の宣教師も、1888年(明治21年)にフランスからはるばる船でやって来ました。横浜港に降り立った時、カタカタ音がするので何だろうと思ったら下駄の音だったとか。食事の時にも、バリバリ音がす

るのでビックリしたら、漬け物を噛む音だったり（笑）。言葉もわからず、生活習慣もまったく違う国に、骨を埋める覚悟でやって来たんですね。すごいなと思います。

清貧、貞潔、従順――この3つの誓願がどういうものなのか詳しく勉強したうえで、1年たった時に自分自身でよく考え、今後も修道生活を望むなら願書を書きます。私はその時、修道生活に入ることを決意しました。私が所属するマリア会の創立者はフランス人で、青少年の教育に一生を捧げられました。この修道会では、小さい子供にモラルや人生の基礎教育を行います。純真な心を持っている間に、神の教えや人に対する道を教えるのです。私は修道生活に入り、教育に一生を賭けようと決心しました。

願書を出した後、体力や健康、常識などが判断されてOKとなり、バイブルに手をおいて「神の名のもとに、清貧と貞潔と従順を一生守ることを誓います」とみんなの前で初誓願しました。1944年（昭和19年）、戦争も末期のことでした。

清貧を誓ったのですから、お金のために働かないでもいい。一生独身なのだから、家族への義務もない。つまり、神様のためにすべてがフリーの状態になれるのが修道士の生活です。私は、私のすべての時間や体力、心を使って教育に従事したいと願い、世俗への配慮を一切絶ちました。

人生を平凡に生きれば、さまざまな束縛が生じてきます。例えば、難民を助けたいと思う気持ちは誰もが持つでしょう。しかし、会社勤めをしていれば、限られた時間しか援助のために行動できません。主婦であっても家事の合間にしかできないでしょう。ところが、修道生活を送る者ならば自由な身なのですから、24時間を援助のために使うことができるのです。

同じ一生なら、普通の生活よりも非凡な生活を送りたいと願いました。その覚悟で、教育に一生を捧げようと決意したのです。ですから、バイブルに手をおいて初誓願した時は、私には何の迷いもありませんでした。

むしろ、これで自由になれるという喜びが大きかったのです。

初誓願したのは7人ほどいましたが、1年ずつ更新していく中で2年目から辞める人も出てきます。〝私には向かない〟〝結婚生活に入りたい〟といった理由です。結局、終身誓願を立てるまで残ったのは2、3人でした。

入隊のため帰省中に被爆

清瀬、茅ヶ崎、九段と転々としながらも、1年間の修練院生活を終え、初誓願を果たした私は、暁星学園の中学5年生に戻りました。

1944年（昭和19年）のことなのですでに戦争は敗色濃く、学校には行かず、勤労動員で品川の近くの大井町にある工場で防毒マスクの生産に従事していました。本土決戦も辞さずという状況の中で、最後は毒ガスを使うだろうと想定して、防毒マスクを作っていたのです。

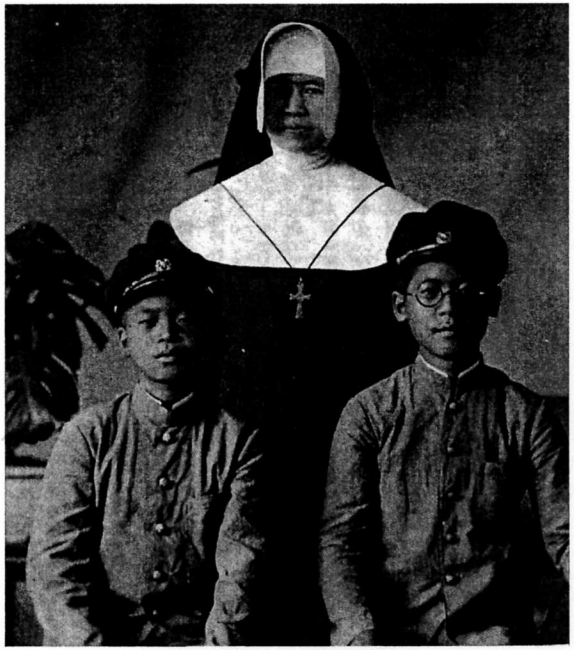
その頃は東京にも空襲がありました。昼間、工場に行って働いている時にも空襲はあったし、電車が爆撃されてストップしたので歩いて帰ってきたり。命の保障がないという、非常に厳しい時代でした。もちろん、食べ物もろくにありませんでした。毎日、飢えと闘い、信仰と闘っていました。

1945年（昭和20年）の3月、中学校を卒業したので軍隊に入らなければいけませんでした。長崎の実家に赤紙と呼ばれていた召集令状が来て、久留米の55部隊に入隊するようにという指示でした。6月に長崎に帰

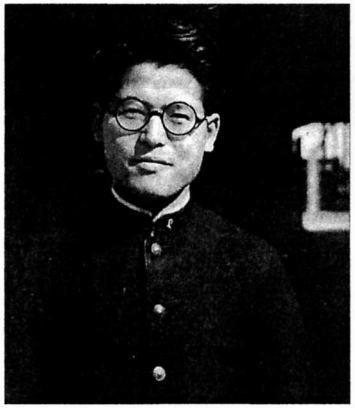
省。軍隊に入るのかと思うと、内心ガッカリした気分でしたが、当時は喜んで行かなければいけないことになっていたので、表面は勇んで見せました。

ところが、いよいよ明日出発という日、市役所から〝自宅で待機せよ〟という延期命令が届いたんです。内心は〝助かった〟と思ったんですが、外部の人には「残念だ」とか言っていました。

自宅の農作業を手伝いながら待機するうち、7月が過ぎて8月を迎えます。いつものように暑い日、長崎に原爆が落ちました。8月9日のことです。長崎には小山がたくさんあって、私の家はそんな小山の1つの陰になったので、半壊で済みました。爆心地からは10kmも離れていませんから、山の上にいたらダイレクトに原爆の光線を受けて危険でした。長兄が山の上にいて、ぐちゃぐちゃになるほど火傷を負い、数年後に死にました。周囲はどこも本当に惨憺たるものでした。私も原爆手帳を持っているんですが、幸いにして、まだ一度も使っていません。



精神的影響を与えた姉と弟と



上智大学哲学科時代

11人の子供を育てた母と兄とともに